



ショートコメント

★★★

Data 2023-17

監督・脚本：イウリ・ジェル  
 パーゼ  
 出演：ヘナタ・ジ・レリス/  
 エドゥアルド・メンド  
 ンサ/カヤ・ホドリゲ  
 ス/ジルレイ・ブラジ  
 ウ・バエス/ヘレナ・  
 ベケル

# ピンク・クラウド

2020年/ブラジル映画  
 配給：サンリスフィルム/103分

2023 (令和5) 年1月31日鑑賞

シネ・リープル梅田

## 👁️👁️ みどころ

パンデミック化し、全世界で猛威を振るったコロナ禍が約3年で収まりつつあるのは幸いだ、が、「その雲に触れたら10秒で死ぬ」という“ピンク・クラウド”とは？

“パンデミック以前に構想された、衝撃のロックダウン・スリラー”。それが本作の売りだが、空気は？水や食料は？そして、経済は？仕事は？収入は？

中国の武漢で見たロックダウンの風景が全世界で数年も続けば、当然、人類は破滅！しかるに、本作に見るストーリーは、あまりに非現実的なのでビックリ？これは、ちょっと誇大宣伝では・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆本作の公式ホームページのイントロダクションには、次の文字が踊っている。

世界が驚嘆！

パンデミック以前に構想された衝撃のロックダウン・スリラー  
 ブラジルの新悦が鮮烈な想像力で描き出す もう一つの結末。

それに続いて、次のとおり解説されている。

2021年のサンダンス映画祭でイウリ・ジェルパーゼ監督のデビュー長編は予期せぬかたちで脚光を浴びた。2017年に脚本が書かれ、2019年に撮影された本作は、当初SFとして構想されていたにもかかわらず、世界的なパンデミックで一変した現実と重なった。

外には一歩も出られず、部屋の中でしか生きられない“ピンク色”のディストピア。そこでジェルパーゼ監督が目指したのは、ルイス・ブニュエル『皆殺しの天使』やサルトル『出口なし』のように、制限された状況下における生存競争ではなく人間の感情を描くことだった。慣れ親しんだ日常を剥奪され、望まぬ非日常が日常になりかわろうとすると、人間は何を求めて何を選択するのか。雲はかたちを変えながら、まるで鏡のように見つめる者の心を照らしかえす。

◆公式ホームページによると、本作のストーリーには、次のとおりだ。

突如現れた  
謎のピンクの雲によって  
部屋の中に  
閉じ込められた人々  
楽観、倦怠、絶望。  
一歩も外に出られないまま、  
やがて世界は  
少しずつ狂っていく――

一夜の関係を共にしていたジョヴァナとヤーゴをけたたましい警報が襲う。突如として世界中に発生した正体不明のピンクの雲―それは10秒間で人を死に至らしめる毒性の雲だった。

緊急事態下、外出制限で街は無人となり、家から一歩も出られなくなった人々の生活は一変する。友人の家から帰れなくなった妹、看護師と閉じ込められた年老いた父、自宅に一人きりの親友……オンラインで連絡をとりあううち、いつ終わるともしれない監禁生活のなかで、彼らの状況が少しずつ悪い方へ傾き始めていることを知るジョヴァナ。そして、見知らぬ他人であったジョヴァナとヤーゴも現実的な役割を果たすことを迫られる。

父親になることを望むヤーゴに反対していたジョヴァナだったが、やがて男の子・リノを出産する。ロックダウン以前の生活を知らないリノは、家の中だけの狭い世界で何不自由なく暮らしており、父となったヤーゴも前向きに新しい生活に適応している。しかし、ピンクの雲が日常の景色となるにつれ、ジョヴァナの中で生じた歪みは次第に大きくなっていくのだった……。

◆本作は、ストーリーが始まる前、次の字幕が表示される。

この映画は2017年に書かれ19年に撮影されたものです。最近の出来事と似ていたとしてもそれは偶然です

この字幕は、「本作はコロナ禍にヒントを得て作られたものではない」ことを強調しているわけだが、それっていかがなもの？イウリ・ジェルバーゼ監督は、「私の予言が現実になった！」と自慢したいの？

◆本作は、いわゆるディスタピア映画。それなら、アイデア勝負であると同時に、スト

ーリー展開や状況設定に、いかにリアル感と緊迫感を持たせるかが勝負になるはずだが、さて本作は？

本作は、ある意味で美しいタイトルどおりのピンク色の雲が広がる中、湖畔に犬を散歩に連れ出していた男が突然倒れて死んでしまうところからスタート。これによって、「その雲に触れたら10秒で死ぬ」という本作のテーマが示されるわけだが、その後のディストピアぶりは？

◆全世界がパンデミック化したコロナ禍の猛威が約3年で収まりつつあるのは幸い。しかし、本作のピンク・クラウドの猛威は、ジョヴァナとヤーゴの間に生まれた子供リノがかなり大きくなるまで続くから大変だ。

コロナ禍では、中国の武漢で実施されたロックダウンの有用性も一時期議論されたが、それ以上に大切な視点は、「コロナと経済との両立」だった。ピンク・クラウドによって地球上の人間の誰もが1歩も外に出られなくなったら、経済はどうなるの？仕事は？収入は？そして、何よりも締め切った部屋の中で換気はできるの？すると空気は？さらに水や食料は？そんな根本的な疑問が山ほどあるが、本作はそんな視点が一切ないから、アレ・・・？イウリ・ジェルバーゼ監督は、その点をどう考えているの？

◆「コロナ禍以前に本作のアイデアを思いついた」というイウリ・ジェルバーゼ監督の才能は素晴らしい。しかし、それを長編映画にした本作のストーリー展開と問題提起はあまりに未熟。私はそう思わざるをえない。そのアイデアだけの“一点突破”なら、30分ぐらいの短編で十分だったのでは？

ストーリー構成やその前提について、前述のような疑問点が目立っている本作を「世界が驚嘆！パンデミック以前に構想された衝撃のロックダウン・スリラー」「ブラジルの新悦が鮮烈な想像力で描き出す、もう一つの結末。」と絶賛するのは、少し誇大宣言では・・・？

2023（令和5）年2月1日記